



2011年5月18日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

口腔疾患領域と漢方医学

大阪歯科大学 歯科医学教育開発室 教授 王 宝禮

(8) 口腔不定愁訴の漢方治療

本日は、口腔不定愁訴に対する漢方治療についてお話しさせていただきます。

まず、口腔不定愁訴の考え方です。近年、口の乾き、口や舌の痛み、口臭などの訴えで来院患者さんが多くなった傾向があります。その原因は、高齢社会、ストレス、多剤薬物投与などが考えられますが、断定することが難しいときがあります。これらの訴えの多くは、身体のどこが悪いのかはっきりしない訴えで、検査をしてもどこが悪いのかはっきりしないものを指します。いわゆる不定愁訴の状態です。

一般的に不定愁訴は、全身倦怠感、易疲労感、寒け、冷え、のぼせ、ふらつき感、めまい、頭痛、耳鳴り、睡眠障害、性欲障害、眼精疲労、不安、緊張、焦燥、抑うつ、心気、集中困難、意欲低下、記憶力低下などのはっきりと自覚できる症状を訴えること、つまり、自律神経失調症や器官神経症などのように、訴えが漠然としており、しかもそれを裏づけ

る身体的疾患が存在しない状態であると言えます。

特に口腔内に訴える不定愁訴、いわゆる口腔不定愁訴として出現しやすい身体症状の疾患は、口腔乾燥症、味覚障害、舌痛症、口臭症、口内痛などが挙げられます。

次に、漢方医学からみた口腔不定愁訴を考えていきます。口腔不定愁訴は、一般の診療で避けることができない患者さんの訴えであります。心身相関の存在する心身症の1つとして治療しなければならないと考えられるときもあります。漢方医学の病因論から考えられる心身相関とは、広義の外風と理解され、風・肝のつながりから、その邪は肝の機能を失調させることから、内風邪に変わると考えられます。

一方、西洋医学的には、不定愁訴は「適切な診察や検査を行っても、その原因や病態を現代医学では明らかにできない身体症状」を広く意味し、患者の身体的な訴えに対してどうしても診断がつけられないとき、こういう言葉を使って説明してしまうことが少なくありません。すなわち、臨床の現場では、「なんともないです」「病気ではありません」「検査で異常ありません」「気のせいです」「精神的なものです」「自律神経失調症」「更年期障害」などの表現でまとめられています。

以上のような説明困難な身体症状は、近年、医学的に説明のつかない症状、**Medically Unexplained Symptoms (MUS)** と位置付けられています。

MUSにおける、西洋医学で病態の理解に苦慮する口腔内の症状は、内科においては例えば口内の苦み、口内の渇き、唾液の分泌亢進、舌の痛みや違和感、味覚の脱失や変化、顎の痛みや違和感、咬合不快感としてカルテに記載される場合が多いです。

現実的にMUSは、西洋医学的な、感染症の菌を殺す抗菌薬や、熱や痛みを取る非ステロイド系抗炎症薬、血圧を下げるカルシウム拮抗薬のような、1つの症状や病気に対する直接的な薬物治療では対応できません。しかし、漢方医学ではMUSを証で説明が可能です。つまり、漢方医学ではMUSを望診、聞診、問診、切診による四診によって、八綱、六病位、気血水、五臓の基本的概念を通じた認識で説明できます。実際、漢方薬は従来、不定愁訴、更年期障害、自律神経失調症のような症状改善が困難な症例に対して有効であるとされており、今回の口腔不定愁訴にもその効果が期待されます。

口腔不定愁訴に対する漢方薬の選択の考え方についてお話します。不定愁訴が現れる場合、脳内の分子レベル的变化では、例えばストレスなどによる神経系への影響、免疫低下による **natural killer** 細胞活性低下、内分泌系である **DHEA-S**、アセチルカルニチン、グルタミン酸の低下などによって神経細胞の機能の異常をきたし、不定愁訴として現れると考えられます。

また、身体表現性障害の認知行動モデルのように、持続するストレスなどの引き金となる要因から身体機能の変化が、知覚神経を經由して、脳が誤った判断や解釈を継続し、そ

の結果、疾病行動および回避行動を繰り返していく。このような生体内の破綻（はたん）から口腔にさまざまな症状が現れ、口腔不定愁訴にいたると考えられます。

例えば、口腔乾燥症にはいろいろな病態が含まれますが、ストレスが引き金となった状態少なくありません。心身症の場合、治療薬として抗うつ薬や抗不安薬が用いられていますが、これらの薬剤も副作用として口腔乾燥を引き起こす可能性が高いです。唾液分泌の低下により口腔内が乾燥し、舌苔がなく鏡面舌を呈している場合は、陰虚として治療を行います。シェーグレン症候群や加齢などで唾液分泌の低下をきたしている場合には、胃陰虚、腎陰虚と扱う場合があります。

また、舌痛症は、脳内の異なった神経回路から同一の症状・愁訴が生じる可能性があるため、画一的な治療より、各個人の回路の病態にきめ細かく対応する、いわゆる个体差医療の必要性が高いことが示唆される疾患であります。

次に口臭症は、真性口臭症や、器質的・機能的な要因がなく、生理的にも社会的にもなんら根拠がなく口臭を訴え続ける場合には、心理療法や漢方治療が有効である場合が多いです。

味覚障害は、西洋医学的には亜鉛製剤の投与が基本ですが、ストレスが要因となることは少なくありません。漢方医学的には、例えば食欲不振を伴う場合は脾虚として扱う場合が多いです。

一方、実際、口腔不定愁訴を訴える患者さんに共通する事項の1つとしては、生命反応の予備能力が少ないことが挙げられます。具体的には「痩せている」「顔色が悪い」「話し方がゆっくり」「声が小さく力がない」「疲労・倦怠感が強い」「食欲がない」「貧血」「手足が冷たい」「皮膚の栄養不足」などの症状がみられます。

また、口腔不定主訴の背景には、ストレス社会、高齢化社会、長期間の多剤療法による薬物の副作用、更年期障害、心身症などが考えられます。

また、例えば女性では、不定愁訴は思春期、分娩、産褥期、更年期によくみられます。すなわち、女性においてはエストロゲンの急激な低下から、内分泌系の変動が中枢神経に影響を及ぼし、精神症状が出現すると考えられます。漢方医学的には、更年期女性の場合は気虚、気逆、気滞が生じやすいです。このような状態は、まさに口腔不定愁訴に一致する部分が多いと思われます。

口腔内の症状に対する漢方薬の選択を考えた場合、症例漢方療法的には、口内炎に対しては半夏瀉心湯、黄連湯、茵陳蒿湯、歯痛や抜歯後疼痛に対しては立効散、そして口腔乾燥症に対して白虎加人参湯、五苓散、麦門冬湯、八味地黄丸が選択される場合が多いです。しかし、口腔不定愁訴が神経系、免疫系、内分泌系の破綻（はたん）に伴って一連の症状を呈し、漢方医学的に生気が弱っていることから、広義に証としては、私たちは虚証と考えております。すなわち、口腔不定愁訴を広義に虚証と判断したとき、なんらかの身体機能

の低下状態に用いて機能回復促進をはかる漢方薬が有効であると考えてきました。

それゆえ、臨床的には消化吸収機能の賦活と栄養状態改善を通じて、身体防御機能を回復させ、治癒促進をはかる。すなわち、補剤系の漢方薬である補中益気湯、十全大補湯、人参養栄湯を積極的に第 1 選択とします。すなわち、口腔不定愁訴が虚弱体質、疲れやすいとし、気虚とし、症状として内臓下垂、胃腸虚弱、食欲不振、寝汗があるならば補中益気湯、また血虚とし、貧血、血液不足、体力不足があり、さらに動悸、息切れ、健忘、眠りが浅い場合には人参養栄湯、あるいは血虚であり、さらに手足が冷え、貧血、体力低下があれば十全大補湯を選択していく。このように考えております。そして、これまで紹介してきた漢方薬を第 2 選択薬として探求していきます。

十全大補湯には、造血能のある四物湯と消化機能を改善する四君子湯が含まれており、気血両虚の場合に用います。補中益気湯は四君子湯をベースとし、消炎作用を有する生薬も含まれており、気虚が著しい場合に用います。六君子湯も四君子湯をベースとしており、補中益気湯より症状が軽い人に用いる場合もあります。また、人参養栄湯は、十全大補湯から川芎を取り、強壮・鎮静作用のある五味子、遠志と健胃作用のある陳皮を加えたものです。すなわち呼吸器系疾患（肺気虚）にも効果があります。

その他に、心熱、胃熱のある場合には半夏瀉心湯、黄連湯、温清飲や加味逍遙散を用いることがあります。

このようにして、口腔不定愁訴に対して第 1 選択薬を補剤、そして第 2 選択薬を他の、今ご説明した漢方薬を選んでいくと、このように考えております。